

修士論文(要旨)  
2013年 1月

社会言語的視点から考える日本語の中途終了型発話  
ーポライトネス(Politeness)を中心にー

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
210J3904  
朴在恩

## 目次

用語の定義	1
<b>第1章 はじめに</b>	<b>3</b>
1.1 研究の背景	3
1.2 研究の目的	6
1.3 研究意義	6
<b>第2章 先行研究と問題点</b>	<b>7</b>
<b>第3章 調査1</b>	<b>16</b>
3.1 調査概要	16
3.2 調査対象者	16
3.3 分析対象	16
3.4 「中途終了型発話」の割合と分析	17
3.5 調査1の分析方向と目的	21
3.6 形式面からみる「中途終了型発話」	21
3.6.1 分析	22
3.6.2 考察	37
3.6.3 まとめ	38
3.7 機能面からみる「中途終了型発話」	38
3.7.1 分析	39
3.7.2 考察	55
3.7.3 まとめ	59
3.8 調査1の総合的まとめ	60
3.9 今後の課題と調査2への方向付け	60
<b>第4章 調査2</b>	<b>62</b>
4.1 調査概要	62
4.2 調査対象者	62
4.3 調査方法	63
4.4 分析対象の範囲と発話の認定	64
4.5 調査2の分析方針と目的	64
4.6 分析	64
4.7 総合的考察	75
4.8 調査2の総合的まとめ	83
<b>第5章 本研究のまとめと今後の課題</b>	<b>87</b>
5.1 本研究のまとめ	87
5.2 本研究の限界	87
5.3 本研究の意義と今後の課題	88
参考文献	a
添付資料1：フェイスシート	i
添付資料2：文字化資料	ii

## 第1章 はじめに

初めて日本の社会に入る非母語話者は、コミュニケーション上の様々な失敗を重ねつつ、「気づきー学びー修正」の過程を経て生の社会言語的日本語を身に付けていく。ところが、その心的負担は小さくない。そこで、本研究では非母語話者の言語の社会化がよりスムーズに進められるよう、スピーチレベル(以下、SL)のうち、「中途終了型発話」に注目する。

異文化間コミュニケーションでは、多かれ少なかれ各自が属していた言語文化やポライトネス観点が影響を与え言語行動として現れる。SLにおいても、非母語話者は今までの学習や各自が持つ社会言語的経験・心理的要素からの判断と解釈でSLを使い分けている。ところが、そこで話者の意図とは違った解釈が生まれることもある。本研究では、日本語母語話者と非母語話者の「中途終了型発話」を「ポライトネス」の観点から見直し、その役割と解釈を明らかにすることを目的とする。なお、本研究で対象とする非母語話者は調査1では5ヶ国、調査2では韓国語母語話者である。

## 第2章 先行研究

本研究は宇佐美(1995、2004他)、伊集院(2004)などの先行研究の結果に基づき、SLのうち、中途終了型発話に関する分析と考察を行う。調査1では、これまでのSL研究を参考に分析するにとどまらず、ポライトネス観点から日本語母語話者と非母語話者の中途終了型発話の分析を行い、特徴を探る。また、これを基にした調査2では、日韓の接触場面での韓国人日本語学習者の中途終了型発話の分析を行うことで、ポライトネス観点での発話の意図の差を探る。これにより韓国人学習者が日本語コミュニケーションを行う際の中途終了型発話への理解と使用を促せると考えるからである。さらに、本研究では、韓国人日本語学習者への中途終了型発話の指導をポライトネス観点から見直すことを提案する。

## 第3章 本研究のまとめ

本研究は日本語コミュニケーションにおけるSLのうち、中途終了型発話に注目したものである。構成として調査1と調査2に分けられている。中途終了型発話を分析していくには、基になる理論が必要である。ところが、先行研究は少ない。そこで、本研究の調査1では中途終了型発話の形式と機能を明らかにすることを目的とした。特に、機能面においては、中途終了型発話が反映する日本の言語文化をポライトネス観点から見直し分析しようと考えた。日本語母語話者と非母語話者両方の中途終了型発話を分析対象とし、両者の役割と解釈の差を明らかにすることを目的とした。その結果、調査1では、1) 母語話者と非母語話者の中途終了型発話に解釈の違いがあることが明らかになった。母語話者と非母語話者それぞれの中途終了型発話を持つコミュニケーション上の形式と機能の分析を行い、両者の発話には多少ずれがあったものの、形式・機能面で関連付けられ、発話されていることが明らかになった。そして、2) ポライトネス観点からの機能面での解釈が、中途終了型発話を見直すために非常に大事な手がかりとなった。それと共に、3) 非母語話者の中途終了型発話が母語話者と比

べ、どのような特徴を持つかを、ポライトネス観点から探ることができた。また、4) 中途終了型発話を持つコミュニケーション上の役割を形式面と機能面に分け分析するに当たって、ポライトネス観点での機能面の会話構造を見出すことができた。残された問題としては、5) これまでSLの分類に入れられず研究者それぞれの判断で分類、研究されてきた中途終了型発話を、日本語のSLに入れ、再分類することができるか、6) 文字化に当たっての中途終了型発話のスピーチスタイルのコーディングを見直すことができるかがある。これらについては、今後の課題にしたい。一方、調査2は調査1の考察結果を基に分析・考察したものである。調査対象は、韓国語母語話者とし、その中途終了型発話の分析を行った。三宅(2011)によると、「配慮をめぐる諸要素の背景には文化の問題があるという。また、ことばをともなって相手に配慮を示す行動は、社会や言語が異なっても普遍的に存在する。しかし、同じようなことを達成する場合でも、異なる文化や異なる言語間では、配慮言語行動に違いがみられる。つまり、配慮言語行動を理解するには、その文化が背景となる」という。調査2の考察では三宅(2011)の言う配慮言語行動の違いに注目し考察を行った。そこで、韓国語母語話者の中途終了型発話の形式と機能面の特徴や意図は何かについて探ることができ、中途終了型発話習得における課題が見つけた。これらは、韓国人日本語学習者向けの日本語コミュニケーションにおける中途終了型発話の習得と教育方法の参考になると思われる。

#### **第4章 本研究の限界**

調査1の中途終了型発話の機能面での考察と発話構造に関しては、母語話者の視点からみるとまた異なる解釈ができる可能性がある。稿者が機能面をポライトネス観点から分析しようとした理由はそのような限界を認識した結果でもある。

また、調査2では、韓国人母語話者の中途終了型発話の形式面と機能面の特徴を1つずつ取り上げ分析した。ところが、調査1から得られた他の形式と機能についてはより詳細な分析までは行えなかった。調査1の理論を確かめ確実にするためにも調査1の考察と発話構造を基にした研究を進めることが必要とされる。

#### **第5章 本研究の意義と今後の課題**

本研究を執筆する中、稿者が考える中途終了型発話についての考えや課題と認識が共通する研究(宇佐美 2012)が最近発表、出版された。宇佐美(2012)は、日本語教育で取り上げる必要がある中途終了型発話習得の課題とその解決方法として、3つを挙げている。本研究の今後の課題は、宇佐美(2012)が述べている3つの課題を参考にする。まず、1番目は、「言外の意味や機能を理解する力を身につける」ことである。そのためには、その理解力を助ける理論が必要であり、その理論の論理を裏付ける研究がなされるべきであろう。そういう意味では、本研究の調査1で中途終了型発話の形式と機能を分析・考察し、特徴を引き出したことは、わずかな成果ではあるが、中途終了型発話の研究を一步進めたこととして意義のある考察であったと考える。今後の研究では、その考察を妥当性のある理論にすることと、それに加えて新しい考察をすることを念頭において研究を進めたい。2つ目は、学習者が「自ら中途終了型発話

を適切に使える力」を持っているか、また中途終了型発話が「日本語の特徴的なやりとり」で「ポライトネスにもかかわっている」という認識を持っているかを分析する必要があるだろう。そして、ポライトネスにかかわっているかどうかについては、調査1でも行ったポライトネス観点からの機能面を結び付けた分析を行う必要があるだろう。3番目は、日本語コミュニケーションで多く現れる「共同発話文」において、「相手の発話の意味や意図を予測する力」を分析することである。構文力を身につけるためには、まず使用の現状と理由を把握する必要がある。それは、中途終了型発話の前後の発話の分析からできると思われる。そこから課題を見つけ、日本語教育への提案ができるだろう。上で述べた課題3つを韓国語日本語学習者を対象として調査分析を行い、解決していくことで、日本語教育への一助となることを願っている。

## 参考文献

- 荻原稚佳子(2008)『言いさし発話の解釈理論』春風社
- 伊集院郁子(2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け-母語場面と接触場面の相違-」『社会言語科学』6号, pp.12-26.
- 宇佐美まゆみ(1993)「初対面の二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違-日本語の場合」『The Communication Association of Japan(CAJ)』pp.25-40.
- 宇佐美まゆみ(1993)「談話レベルから見た“politeness” - “Politeness theory”の普遍理論確立のために -」『ことば』14(12), pp.20-29, 現代日本語研究会
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス-ディスコース・ポライトネス理論の観点から-」『国語学』第54巻 3号, pp.117-132.
- 宇佐美まゆみ(2007)『改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)』2007年3月31日改訂版
- 小田美恵子(2002)「中途終了型発話の横断的研究：中・上級韓国人学習者の発話から」『龍谷大学国際センター研究年報』11号, pp.15-26.
- 川口義一(2005)「海外における待遇表現教育の問題点-台湾での研修会における「事前課題」分析(3)-」『紀要』早稲田大学日本語研究教育センター16:37-50
- 金珍娥(2002)「日本語と韓国語における談話ストラテジースピーチレベルシフト」『朝鮮学報』第183 朝鮮学会
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(1997)『文章・談話のしくみ』おうふう
- 白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 真田真治(2006)『韓国人による日本社会言語学研究』おうふう
- 真田真治(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版
- 真田真治(2008)『活動としての文と発話』ひつじ書房
- 申媛善(2009)「韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用-時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して-」『日本語教育』140号, pp.81-91.
- 陳文敏(2000b)「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話-表現形式及びその生起の理由-」『言葉と文化』第1号, pp.125-141.
- 徳井厚子・榎本智子(2006)『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』ひつじ書房
- J.V.ネウストプニー(2003)『外国人とのコミュニケーション』岩波新書
- 野田尚史(2012)『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
- 堀口純子(1990)「対話における省略の復元のストラテジー」『文藝言語研究』言語編
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 三牧陽子(2007)「文体差と日本語教育」『日本語教育』134号, pp.58-67.
- Brown,P. and Levinson, S. (1987) “Politeness : Some universals in language usage. Second edition”, Cambridge University Press.
- Ikuta, Shoko(1983) “Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse”, Language Sciences 5/1:37-53.